

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

1924年のパリ・オリンピックにおける大芸術祭

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 彬, Takeuchi, Akira メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1374

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



1924 年のパリ・オリンピックにおける大芸術祭

竹内 彬

Grand saison d'art in the 1924 Paris Olympics

Akira TAKEUCHI

キーワード：1924 年パリ・オリンピック 大芸術祭 芸術展示 文化プログラム

はじめに

近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタン男爵 Pierre de Coubertin (1863-1937) は、オリンピックを肉体と精神の向上の場と考えており、建築、彫刻、絵画、音楽、文学の 5 部門からなる芸術競技を、1912 年のストックホルム・オリンピックから開始させた。その後、1952 年のヘルシンキ・オリンピックからは芸術展示に、1992 年のバルセロナ・オリンピックからは文化プログラムへと姿は変えいくが、スポーツと芸術の祭典というオリンピックの理念は時代を経ても引き継がれている。芸術競技に関する研究は、尾崎正峰 (2018)、文化プログラムに関しては榎本直文 (2016) らによってなされているが、それ以外のオリンピックと音楽に関する研究は少ない。一方で、1924 年のパリ・オリンピックにおける、オリンピック委員会主催の大芸術祭 Grand saison d'art¹の概要については、スタンリー・ヘニッグ Stanley Henig の『文化オリンピアードの音楽ーパリ 1924 年 *Music for the Cultural Olympiad - Paris 1924*』(2012) によって述べられている。ヘニッグは、1924 年時のパリのクラシック音楽、オペラ、バレエといった芸術におけるレベルの高さを世界に向けて発信した、委員会主催の大芸術祭は、後の時代の芸術展示や文化プログラムの源流とも言えると考察している。しかし、大芸術祭が開催される経緯、2 ヶ月間にも渡る約 60 回にもおよぶ主催公演の具体的な内容や、実際に人々にはどのように受容されていたかについては詳しく論じておらず、概要を考察するにとどまっている。

本研究の目的は、1924 年のパリ・オリンピックにおける委員会主催の大芸術祭のより詳しい全体像を明らかにし、フランスは音楽文化の面で、世界に向けて何を発信したのかを考察することである。そのために次の段階を設ける。1) 公式報告書より、大芸術祭が開催される経緯を調査する。2) 大芸術祭の公式プログラムに掲載されている、さまざまなジャンルの公演を整理し分類する。このことにより、主催者側のプログラムを組む上での意図が明らかになるであろう。くわえて、音楽雑誌『メネストレル *Ménestrel*』における批評を通して、この一連の公演が人々にどのように受容されたかを調査する。3) 最後に、これまでの調査また当時の文化状況を踏まえ、フランスにとって大芸術祭というのは何であったか、大芸術祭を通して、フランスは世界に何を発信しようとしていたのかを考察しよう。

¹ 大芸術祭は、原語のフランス語ではグラン・セゾン・ダール Grand saison d'art と表記されて、日本語では、芸術の大シーズンという意味となり、本研究では大芸術祭と訳した。

1 大芸術祭が開催される経緯

まず、大芸術祭が開催される経緯について述べる前に、大芸術祭の概略を説明しよう。この大芸術祭は、国際オリンピック委員会とフランス・オリンピック委員会の主催で行われた。期間は1924年5月2日から7月5日の約2か月間で、演目は管弦楽、オペラ、バレエ、リサイタル、ガラコンサートなどで、合計約60回の公演²が、シャンゼリゼ劇場で行われた。ちなみに、競技大会の予選は5月4日から、大芸術祭に並行して行われ、オリンピック大会の開会式は大芸術祭の最終日7月5日に行われた。

1-1 オリンピック委員会の当初の計画

次に、大芸術祭が開催される経緯を、公式報告書³をもとに述べる。この公式報告書とは、オリンピック大会が終わった後に、開催国のオリンピック委員会によって発行されるものである。オリンピックに関する行事は、オリンピック憲章によって細かく規定されている。絵画、彫刻、建築、音楽、文学の5部門からなる芸術競技に伴って、絵画、彫刻、建築部門では受賞した作品などの展示会を、音楽部門ではなにか公演を行うことが決められていた⁴。そこで、この公演の実質的な運営をする芸術審議会 la Commission des Arts は、オリンピック参加各国に、その国の音楽を展示するのにふさわしい演目（合唱、舞踏、歌劇団、著名な芸術家）を募り、それらをまとめて一つのシーズンを作ることを考えた。この、方法は万国博覧会の音楽展示にとっても似ている。実際、1900年の第2回パリ・オリンピックは万博に伴って行われていた。芸術に関係する省庁も、この企画を歓迎し、支援を約束している。実際、どのような支援をしたのかはわからないが、公式プログラム⁵の協賛・後援の欄にはフランス大統領 *President de la République Française* や外務省 *Ministre des Affaires Étrangères* をはじめ政府機関の名がのっている。さらには、国民美術協会 *des Beaux-Arts* の名もあり、フランスの芸術に関係する様々な機関がこの大芸術祭に係っていたことが分かる。(図1)



(図1) 公式プログラム

² 大芸術祭の公式プログラムに載っていないが、新聞雑誌には大芸術祭の一環として掲載されていた公演もあり、公演の合計数には約をつけた。

³ 公式報告書の正式名は『1924年パリ夏季オリンピック競技大会公式報告書 *Rapport officiel des Jeux Olympiques d'été de Paris 1924*』(1924年出版)であり、現在、オリンピック・ワールド・ライブラリーで閲覧可能である。参照 URL <https://library.olympic.org/Default/accueil.aspx>

⁴ 1924年の『オリンピック憲章—国際オリンピック委員会の定款、ルールと手引き *Charte olympique - Statuts du comité international olympique, règlements et protocole*』の「芸術と文学」という章(11ページ)を見ると、たしかに芸術競技に合わせて芸術的な行事が催されることが望ましいと記されている。この憲章は現在、国際オリンピック委員会の公式ホームページで閲覧可能である。

参照 URL <https://www.olympic.org/olympic-studies-centre/collections/official-publications/olympic-charters>

⁵ 『大芸術祭の公式プログラム *Programme de la grande saison d'art*』も、先述のオリンピック・ワールド・ライブラリーで閲覧可能である。

オリンピック委員会の当初の計画では、音楽の公演をメイン陸上競技場⁶で、運動競技と同時に行うことを計画していた。しかし、その野外競技場の大きさに釣りあうだけの、音楽的な表現方法や技術的手段がないため、この計画は実現不可能となった。また、パリ・オペラ座の芸術監督に大芸術祭の実現への援助を打診したが、オペラ座の音楽家たちとの契約や費用の問題で援助を受けることはできなかった。

このように大芸術祭は当初、政府機関などの開催するための後ろ盾はあったものの、具体的な公演内容を考える段階では思うように計画は進まなかったようである。そんな中、現れたのはシャンゼリゼ劇場の支配人であるジャック・エベルト Jacques Hébertot (1886-1970) である。

1-2 シャンゼリゼ劇場の支配人ジャック・エベルト

エベルトは 1920 年から 1925 年までシャンゼリゼ劇場の支配人を務めた人物である。シャンゼリゼ劇場は 1913 年に建てられた、まだ新しい劇場であったが、エベルトの貢献もあって、フランス国外の団体によって歌劇、バレエ、演劇作品を数多く上演し、パリの中で最も進歩的で多様な公演を行う劇場として、その地位を確立していた。シャンゼリゼ劇場は、オリンピックの始まる前の夏のシーズンに、十分にスケジュールの空いている唯一の劇場であり、また客席のキャパシティは約 1900 席と十分な広さのある劇場で、大芸術祭には相応しい会場であった。くわえて、オリンピック委員会とエベルトの話し合い開始の時期を報告書から知ることができないが、エベルトは委員会の話し合いよりも前に、あらかじめ、実現可能な夏のシーズンの公演計画をいくつか考えていた。例えば、著名な指揮者ウォルター・ダムロッシュ Walter Damrosch (1862-1950) との契約や、ウィーン国立歌劇場との交渉もすすめていた。

最終的に、オリンピック委員会は、委員会自身が興行主催者となった十分な経験がないこと、そして、エベルトの提案を受け入れるのはさまざまなリスクの回避にもなると考え、エベルトと契約し、大芸術祭をシャンゼリゼ劇場で行うことを決定したのである。ちなみに、委員会は会場使用料として 10 万フランを支払うこと、また、大芸術祭の収入と費用を管理する権利をオリンピック委員会がもつこと、そして、プログラムの決定は事前の合意後に行うという条件で契約を結んでいる。つまり、オリンピック委員会の意向が、公演のプログラムには反映されていると言えるだろう。

以上が、大芸術祭が開催された経緯である。

2 フランス国内の演奏家・演奏団体による公演

大芸術祭で行われた約 60 回の公演は、様々な国の演奏家・演奏団体によって行われた。それらを、フランスの演奏家・演奏団体とフランス国外の演奏家・演奏団体に分類し、公演の具体的な作品を記述する。なお、大芸術祭の公演一覧は巻末資料に記載する。

⁶ 1924 年のパリ・オリンピックのメイン陸上競技場は、パリ北西部近郊コロಂಬにあるコロಂಬ・オリンピック競技場 Stade Olympique de Colombes である。1924 年 7 月 5 日、この競技場でオリンピックの開会式は行われたが、オリンピック旗の掲揚の際には C.ドリュッシーの《聖セバスティアンの殉教》のファンファーレが、選手宣誓と国旗の降納の際には C.サン＝サンサーンスの《英雄行進曲》が、ギャルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団によって演奏された。この開会式の様子は、1924 年 7 月 6 日付の夕刊紙『プティ・パリジャン *le Petit Parisien*』に詳しく掲載されている。

2-1 大芸術祭の開会式

まず、本格的な公演に先立ち行われた開会式 *Séance Solennelle d'Inauguration* について記述する。5月2日に行われた開会式は、4部構成になっており、①ギャルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団の演奏、②アルベール・ランベールによるジャン・リシュパン詩の朗読、③アスリートたちによる参加国の国旗とオリンピック旗の掲揚、④アイスキュロスのギリシャ悲劇『アガメムノン』が行われた。それぞれの内容はどれもスポーツに関係するもので、オリンピックならではの興味深い内容となっている。

共和国親衛隊に所属する軍楽隊、ギャルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団 *Musique de la Garde Républicaine* は、ギヨーム・バレイ *Guillaume Balay* (1871-1943)の指揮によって、フランス国家《ラ・マルセイエーズ *La Marseillaise*》、カミーユ・サン＝サーンス *Camille Saint-Saëns* (1835-1921)の《英雄行進曲 *Marche héroïque*》、アンドレ・カプレ *André Caplet* (1878-1925)の《第5部隊の行進 *Marche de la 5^e Division*》を演奏した。どの作品もオリンピックに参加する競技者たちの士気の高揚させるような曲調である。

次に、ジャン・リシュパン *Jean Richepin* (1849-1926)による『アスリートへの敬礼 *Salut aux Athlètes*』が、コメディフランセーズの俳優であるアルベール・ランベール *Albert Lambert* (1865-1941)によって朗読された。

そして、アスリートたちによる参加国の国旗とオリンピック旗の掲揚が行われ、最後に、アイスキュロスのギリシャ悲劇『アガメムノン』が行われた。台本はマーク・ヘンリー *Marc Henry* (1873-1943)によってフランス語に翻訳され、クリストフ・グルック *Christoph Gluck* (1714-1787)の音楽がつけられた。アンドレ・カドゥ *André Cadou* (1885-1973)の指揮でオデオン国立劇によって上演された。『アガメムノン』は、トロイア戦争におけるギリシャ側の総大将アガメムノンを題材とした作品である。公式プログラムによれば、劇中で100人のアスリートによる演武も行われたようである。

この開会式の内容はかなりスポーツと関連する作品を盛り込んだものであり、ギリシャ悲劇を演じるというのも、ギリシャの古代オリンピックを意識したものであろう。クーベルタン男爵は、建築、彫刻、絵画、音楽、文学の5部門からなる芸術競技を、肉体と精神との向上のために設立したが、この大芸術祭の開会式とは、まさに、クーベルタン男爵の理念が実現している場であると言えよう。

音楽雑誌『メネストレル』はパリの音楽文化を伝える週刊誌であり、多くの人々に読まれていた。大芸術祭についても、期間中、毎週、全9回にわたって批評を書いている。この開会式についても、ピエール・ド・ラポムレイユ *Pierre de Lapommeraye* (n.d.-n.d.)が、1924年5月9日号で批評している。以下は、筆者が翻訳し、まとめたものである。

演劇や音楽の批評家が招待され、シャンゼリゼ劇場で大芸術祭は開かれた。2つの行進曲はトランペットや太鼓が強調されかなりの大音量であったため、野外で聞いたならばより最適であり、この点がこの公演の一番の失敗である。国旗と五輪旗が掲揚されるも、この五輪が何を意味するのかをこの執筆者は知らず、さらに、参加アスリートの行進もあったが、オペラ座のダンサーのようがより美しく行進するだろう。バレイエはスポーツではないのだろうか。『アガメムノン』は、その内容がオリンピック競技の幕開けとしてとてもふさわしかったが、兵隊や音楽隊の衣装がやや

モダンすぎる。マーク・ヘンリーによって翻訳された台本はとても素晴らしかったが、グルックの音楽の入るタイミングが悪く、声に被り、セリフの理解を妨げていた。(Lapommeraye 1924: 207)

ラポムレイユがどのような人物であるか分からないが、メネストレスで批評を執筆するということは芸術音楽にあかるい人物であろう。オリンピックとの関連で言えば、開会式の内容は優れた点もあるが、質の部分では芸術音楽の批評家ラポムレイユの立場から言えば、不服な点も多く見られたと言えよう。

ところで、1924年のパリ・オリンピック競技大会の開会式の内容は、選手入場、大統領やオリンピック委員会会長などの挨拶、選手宣誓などで、とてもシンプルなものであった。一方で、近年のオリンピックの開会式は、音楽や演劇、ダンスなど様々な芸術的な要素を取り入れた長時間に渡る大規模なショーが加えられ、むしろ、本来の意味での開会式としての部分は、時間的にかなり少なくなっている。ここで、これらの開会式を比較した時、近年のオリンピック開会式における先ほどのショーの部分の源流は、大芸術祭における開会式に見ることはできないであろうか。そして、1924年のパリ・オリンピックにおける、2つの開会式が融合され、近年のオリンピック開会式に繋がっていると言えないであろうか。

2-2 フランスの管弦楽団

大芸術祭は、フランス国内のさまざまな演奏者・演奏団体が出演した。管弦楽団では、パリ音楽院演奏会協会 Orchestre de la Société des Concerts du Conservatoire、コロヌ管弦楽団 Concerts Colonne、ラムルー管弦楽団 Concerts Lamoureux といった、パリを拠点に活動しているフランス屈指の管弦楽団が演奏している。

パリ音楽院演奏会協会は、フランス作曲家による当時まだ新しい作品を、複数の指揮者で演奏した。具体的な作品は、以下の表の通りである。(表1)

作曲家	作品名
V.ダンディ	3つの交響的序曲《ヴァレンシュタイン》作品12よりI
G.フォーレ	ペレアスとメリザンド
F.シュミット	サロメの悲劇
M.ラヴェル	第2組曲《ダフニスとクロエ》
C.ドビュッシー	《夜想曲》より〈雲〉、〈祭り〉
H.ラボー	祭列の夜想曲
P.デュカース	魔法使いの弟子

(表1) パリ音楽院管弦楽団による 1924年5月4日の演奏会

コロヌ管弦楽団は1873年から1889年の間に書かれたフランス人作曲家の作品を、ガブリエル・ピエルネ Gabriel Pierné (1863-1937) の指揮で演奏した。具体的な作品は、以下の表の通りである。(表2)

作曲家	作品名
E.ラロ	オペラ《イスの王様》序曲
H.デュパルク	2つのメロディ
C.サン＝サンサーンス	死の舞踏
E.ファネリ	《ミイラ物語による交響的絵画》より〈ファラオの凱旋入場〉
C.フランク	交響曲ニ短調
C.ドビュッシー	牧神の午後への前奏曲
G.シャルパンティエ	ナポリ

(表2) コロンヌ管弦楽団による 1924 年 5 月 9 日の演奏会

ラムルー管弦楽団は、フランス作曲家による当時まだ新しい作品とフランス・バロックのアリアを、ポール・パレイ Paul Paray (1886-1979) の指揮で演奏した。(表3)

作曲家	作品名
E.ショーソン	交響曲
J.Ph.ラモー	叙情悲劇《カストールとポリュックス》よりテライールのアリア
C.グルック	アルケステイスのアリア
M.ラヴェル	ラ・ヴァルス
P.デュカース	ラ・ペリ
H.ラポー	気まぐれなブルーレ

(表3) ラムルー管弦楽団による 1924 年 5 月 14 日の演奏会

この他に、パリ音楽院管弦楽団はダムロッシュの指揮で、ベートーヴェンの交響曲シリーズを行っているが、これまで見てきた通り、これらの3団体による演奏会では、フランス人作曲家による作品が演奏されたことが分かる。さらに、扱われた作曲家は、当時、存命中か死後間もない人物がほとんどである。H.ベルリオーズ、J.マスネ、G.ビゼー、C.グノーといったフランス・ロマン派を代表する作曲家、すなわち、当時の人々にとっては前時代の作曲家の作品は演奏されていない。つまり、大芸術祭は、管弦楽団にとっては、ロマン派以降のフランスの今の音楽を発信する場であったことと考えられるだろう。

2-3 フランスの合唱団

合唱では、フランス合唱団 *chorale française*、ナント・スコラカントルム合唱団 *chœur de Schola Cantorum de Nante* が大芸術祭に出演している。

フランス合唱団は、1924 年 5 月 3 日に行われた、ガブリエル・フォーレ Gabriel Fauré (1845-1924) の抒情悲劇《プロメテウス》とアルテュール・オネゲル Arthur Honegger (1892-1955) の劇的詩篇《ダヴィデ王》の演奏会に参加している。この演奏会についてラポムレイユは 1924 年 5 月 9 日号の『メネストレル』で次のように批評している。以下は、筆者が翻訳し、まとめたものである。

全く異なる個性による見事な2つの作品。見事な平穏さと、美しいオーロラの流れの中で光る、深い哀れみのフォーレの《プロメテウス》。一方、活力と情熱と若さで

震えるオネゲルの《ダビデ王》。自作の指揮をしたオネゲルは聴衆から大いに歓迎された。バッハのような頑強さと堅実さを備え持ったオネゲルは、輝くばかりに透明で、そして、壮麗で豊かなオーケストレーションによって、合唱団を支えている。
(Lapommeraye 1924: 208)

パリ音楽院の学長にもなった、当時のフランス音楽界の重鎮フォーレと、新進気鋭オネゲルという、ある意味では対照的な両者の作品を取り上げるこの演奏会は、ロマン派以降のフランス音楽のはじまりとこれからのフランス音楽を表していると考えられるであろう。

ナント・スコラカントルム合唱団はコロヌ管弦楽団と共に、フランシスコ・デ・ラセルダ Francisco de Lacerda (1869-1934) の指揮で、J.C.バッハの《ヨハネ受難曲》を演奏している。この演奏会について、1924 年 5 月 23 日号の『メネストレル』は、匿名 (E.L.) で次のような批評を掲載している。以下は、筆者が翻訳し、まとめたものである。

数日前にメンゲルベルク氏の指揮で演奏された《マタイ受難曲》よりも、親しみやすく、複雑でないこの作品は若い世代にはよりふさわしいだろう。精力的な芸術活動をしているル・マイネン夫人の下で設立されたこの組織は日に日に団結力を増しており、フランス国内では存在自体が珍しい、声楽アンサンブル団体の先頭に立とうとしている。演奏の完成度に比べ、声の質が劣るものの、おそらくパリ混声合唱団よりも優れた団体でしょう。ヨハネ受難曲の演奏は大変すばらしいものだった。
(E. L. 1924: 234)

パリで行われたオリンピックであるが、パリの団体だけでなく、地方都市ナントの合唱団が出演しているのは、大芸術祭が決してパリだけの公演ではなく、フランス全体による公演である認識が、パリ・オリンピック委員会あるいはシャンゼリゼ劇場の支配人エベルトにはあったと考えられるであろう。

2-4 フランスの演奏家

これまでに挙げてきた演奏団体の他にも、ソリストとして大芸術祭に出演したフランス演奏家も多くいる。ピアニストでは、エドゥアール・リスラー Édouard Risler (1873-1929)、マリウス＝フランソワ・ガイヤール Marius-François Gaillard (1900-1973) がリサイタルを行っている。ベートーヴェンのピアノソナタ全曲演奏会を行ったことで知られるリスラーは、ベートーヴェンの《ピアノソナタ作品 53》、《ピアノソナタ作品 57》の他にクーブランやドビュッシーの小品、ショパンの《ト短調バラード》、リストの《伝説》や《ホ短調ポロネーズ》などを演奏している。一方、ガイヤールはドビュッシーの《前奏曲集第 1 巻》、《同曲集第 2 巻》、ミヨの組曲《ブラジルへの郷愁》を演奏している。実は、公式プログラムには、使用されたピアノについても記載されているが、リスラーはエラールのピアノを、ガイヤールはプレイエルを使用している。フランスを代表する 2 大ピアノメーカーの両方を使用し、宣伝しているということは、フランスの人々にとって、音楽文化の中には、演奏者や作品だけでなく、ピアノという楽器そのものも含まれていると考えることもできる。そういった意識の高さや自国の文化に対する誇りが、文化都市としてのパリを支え

ているのかもしれない。

この他にも、アルフレッド・コルトー（ピアニスト） Alfred Cortot（1877-1962）、ジャック・ティボー（ヴァイオリニスト） Jacques Thibaud（1880-1953）は、後述するパプロカザルス管弦楽団と共演をしている。また、ニノン・ヴァラン（ソプラノ歌手） Ninon Vallin（1886-1961）はロシア人ダンサーとガラコンサートをを行っている。これらの演奏家は、もちろん、当時パリだけでなく国際的にも活躍した演奏家たちである。

3 フランス国外の演奏家・演奏団体による公演

大芸術祭では、フランス国外の演奏家・演奏団体も多く出演している。これは、大芸術祭の計画の初期段階から構想していたものであり、オリンピック委員会はオリンピック競技に参加する国に出演を呼び掛けていた。どの国の公演も、その国の音楽や芸術を表している特色ある内容である。

3-1 バレエ・リュス

セルゲイ・ディアギレフ Serge Diaghilev（1872-1929）が主宰する、バレエ・リュスは 1909 年にパリで旗揚げして以来、ヨーロッパの音楽・舞踊・美術といった芸術をけん引する存在となった。パリにおいても人気を博していたバレエ・リュスを、大芸術祭の公演の 1 つに組み込むことは、大芸術祭を盛り上げるためには効果的であったであろう。実際、バレエ・リュスによって、バレエとオペラの 12 の演目が計 12 回の公演にわたって上演された。その演目にはダリウス・ミヨー Darius Milhaud（1892-1974）の世界初演のオペレッタ《ブルートレイン》（B.ニジンスカ振付）も含まれている。バレエ・リュスが人々に注目されるのは、作曲家や振付の斬新さだけではなく、台本や衣装、舞台美術を、当時の最新鋭の芸術家が担当したことにもある。《ブルートレイン》の台本はジャン・コクトー Jean Cocteau（1889-1963）が、衣装はココ・シャネル Coco Chanel（1883-1971）が、舞台美術はアンリ・ローランス Henri Laurens（1885-1954）、そして、幕はパブロ・ピカソ Pablo Picasso（1881-1973）が担当している。

《ブルートレイン》は、アクロバティックな動きが得意なアントン・ドーリン Anton Dolin（1904-1983）というイギリス出身の男性ダンサーの魅力を見せるために書かれたオペレッタであった。しかし、オペレッタとは言ってもセリフのないオペレッタという特殊なものである。当時、パリとドーヴィルという避暑地を繋ぐ列車ブルートレインが実際開通したばかりであった。この現実世界のブルートレインと、このバレエにおけるブルートレインは同一のものではないが、台本を書いたコクトーは、キャバレーのアクロバティック・ダンサー、ゴルフ、水泳、徒競走のスローモーションフィルムなど、俗っぽい世界からインスピレーションを得たとされている。また、日焼けを楽しむ様子や海水浴場、フラッシュ付小型カメラなど新しい流行も随所に取り入れられている。ダンサーの身につけたシャネルのデザインしたアクセサリや帽子が、現実世界でも流行したと言われている。

このスポーツを題材にしたバレエを、オリンピックの記念として、コルトーが書いたかどうかは分からない。しかし、揶揄する対象としてコクトーがスポーツを選んだということ、そして、同じくバレエ・リュスにはテニスを題材にした 1913 作曲のドビュッシーの遊戯あることから、この時代のフランスでは、スポーツがかなり最先端の流行で、芸術音楽

の題材になるほど影響力があったと言えるであろう。また、制作する側としても、最先端のものを題材にすることは、注目され売れるためには必要な選択であったのかもしれない。

この他にも、世界初演ではないが、バレエ・リュスのパリ初演の作品は、バレエ《牝鹿》(F.プーランク作曲/B.ニジンスカ振付)、バレエ《うるさがた》(G.オーリック作曲/B.ニジンスカ振付)、バレエ《女羊飼いの誘惑》(M.モンテクレール作曲/B.ニジンスカ振付)、オペラ《教育不足》(E.シャブリエ作曲)と4つもある。これだけの、新作を生み出すことができる勢いのあるバレエ・リュスに、パリの人々は大いに注目したであろうし、主催者であるオリンピック委員会やシャンゼリゼ劇場の支配人エベルトの期待も大きかったであろう。その期待は、公式プログラムにも表れている。公式プログラムにおいて、バレエ・リュスに関するページはかなりの量が充てられており、演者についてだけでなく、衣装のデッサンなどもカラーで載せられている。(図2、図3) このことから、バレエ・リュスは、大芸術祭の目玉となる公演であったと言えるであろう。



(図2) ピカソによるデッサン



(図3) マリー・ローランサンによる
《牝鹿》の衣装デッサン

ところで、バレエ・リュスとは別に、大芸術祭で世界初演された作品には、フランス人作曲家レオ・ザックス Léo Sachs (1856-1930) の叙情劇《城主たち *Les Burgraves*》がある。この作品はヴィクトル・ユーゴー Victor Hugo (1802-1885) の、中世のライン川を舞台にした王と城主と囚人の戯曲『城主たち』を元に作られた作品で、ラムルー管弦楽団の演奏、ポール・パレイの指揮で、大芸術祭において3回上演された。世界初演ともなれば、注目される演目となりそうであるが、この歌劇は公式プログラムには、公演日時や演者以外、話のあらすじや作曲者ザックスについての情報は記載されていない。1924年6月27日号の『メネストレス』で、ポール・ベルトラン Paul Bertrand (n.d.-n.d.) は、この『城主たち』という題材は時代遅れであり、またその叙情性は言葉自体にあるのであって、音楽にするには不適切であると述べている。しかし、ベルトランはこの作品はオリンピックの大芸術

祭の中で、フランスの現代の抒情劇を代表する作品として、外国人の目に映りえるとも述べている (Bertrand 1924: 289)。

ここで、この 2 つの世界初演を比べると、同じフランス人作曲家の作品ではあるが、《ブルートレイン》と《城主たち》は内容が全く異なる作品である。《城主たち》の楽譜を手に入れることができないため、どのような音楽かは分からないが、取り扱う題材が現代のパリと中世で対照的であるし、同じ舞台作品であっても、セリフのないオペレッタと叙情劇は、新しいものとフランスの伝統的なもので対照的である。その対照的な 2 つの作品が、同じ大芸術祭の世界初演という立場で取り上げられるということは、新しい音楽や文化を受け入れる姿勢と、過去の良き伝統を引き継ぐ姿勢、一見すると矛盾しているようなこの両方の姿勢を、フランスは世界に向けて表明していると言えるであろう。過去の良き伝統を引き継ぐという姿勢は、次に取り上げる公演にも表れている。

3-2 古楽の演奏会

スペイン出身のソプラノ歌手マリア・バリエントス María Barrientos (1884-1946) と、ポーランド出身のクラブサン奏者ワンダ・ランドフスカ Wanda Landowska (1879-1959) は 2 回の古楽演奏会を行った。ランドフスカは、忘れ去られてしまっていた楽器チェンバロを、20 世紀に復活させた人物である。演奏された曲目は、ラモーやハッセ、ヘンデル、モーツァルトの声楽作品や、バッハ、テレマン、スカルラッチェなどの鍵盤作品である。ランドフスカはプレイエルとの共同開発によって、新しいクラブサンを作っているが、この演奏会ではプレイエル社のクラブサンとピアノが両方用いられている。この演奏会について、1924 年 5 月 16 日号の『メネストレル』は、匿名 (P.B.) で次のような批評を掲載している。以下は、筆者が翻訳し、まとめたものである。

決して強い声ではなく洗練された歌声で、作曲家の意図に忠実に巧みに歌い上げるバリエントスは聴衆を大いに魅了したが、数作品において、珍しく高音域の単純さに欠けている。ランドフスカはクラブサンで伴奏を行い、バッハの協奏曲やバロックの小品を精密で巧みな技巧で演奏した。しかし、過去の偉大な作曲家の作品を演奏する喜びを彼女自身は十分に感じていたようだったが、クラブサンの音が遠くまで届かないこともあってか、それは聴衆にはあまり伝わっていなかったようであった。2 回目のリサイタルは 2 人の素晴らしい技術を芸術性と称賛している。(P.B. 1924: 219)

クラブサンという楽器がパリの人々にまだ馴染みがなく、演奏されたシャンゼリゼ劇場が広すぎたという点はあるものの、古楽器による古楽の演奏という、パリの人々にとっては新しい音楽分野を大芸術祭の中に組み込んだのは、先述の過去の良き伝統を引き継ぐという姿勢があるからであろう。

3-3 新聞の記事や広告で宣伝されていた公演

夕刊紙『プティ・パリジャン *Le Petit parisien*』は、大芸術祭の開催中、文化欄で毎日、大芸術祭の公演を紹介していた。その中で、先述のバレエ・リュスとコンサートヘボウ管

弦楽団トーンクンスト合唱団は新聞記事として、その公演を宣伝された。さらに、ウィーン国立歌劇場によるモーツァルトのオペラ、コルトーとティボーと共演するカザルス管弦楽団の演奏会、ロシアの著名なダンサーのアンナ・パヴロワ Anna Pavlova (1881-1931) のガラコンサートは、以下のように、大々的に宣伝されている。(図 4、図 5、図 6)



(図 4) ウィーン国立歌劇場



(図 5) カザルス管弦楽団



(図 6) アンナ・パヴロワ

オランダのコンサートヘボウ管弦楽団とトーンクンスト合唱団は、ウィレム・メンゲルベルク Willem Mengelberg (1871-1951) の指揮によって、ベートーヴェンの第 1 番と第 9 番の交響曲やバッハの《マタイ受難曲》、ラヴェルの《ラ・ヴァルス》、フォーレの《レクイエム》を 3 回の公演にわたって演奏した。この演奏会について、1924 年 5 月 30 日号の『メネストレル』で、ジャン・シャンタヴォワヌ Jean Chantavoine (1877-1952) は、次のように批評している。以下は、筆者が翻訳し、まとめたものである。

オーケストラと合唱団のバランス、ニュアンス、アーティキュレーション、アタックといったすべての面における演奏レベルの高さを大絶賛しており、3 つの公演それぞれで聴衆たちは熱狂していた。シャンタヴォワヌは解釈の面でいくつかを指摘しているものの、メンゲルベルクと演奏者たちの音楽への真摯な態度に賛辞を送っている。(Chantavoine 1924: 247)

ウィーン国立歌劇場はモーツァルトの 3 つのオペラ、《フィガロの結婚》、《ドン・ジョヴァンニ》、《後宮からの誘拐》を計 6 公演、くわえて、モーツァルトの交響曲の演奏会も行った。また、パブロ・カザルス Pablo Casals (1876-1973) 率いるカザルス管弦楽団は、コルトーと《サン＝サンサーンスのピアノ協奏曲第 4 番》を、ジャック・ティボーはカザルスとブラームスの《二重協奏曲》を演奏している。また、グラナドスやファリャ、アルベニスなどのスペインの作品だけでなく、ドビュッシー、リヒャルト・シュトラウス、ベートーヴェンなどの作品も演奏している。

これらの宣伝された公演は、すべてフランス国外の演奏者・演奏団体による公演であり、『プティ・パリジャン』においては、国内の演奏者・演奏団体による公演は大々的には宣伝されていない。つまり、オリンピック委員会やシャンゼリゼ劇場の支配人エベルトが特に注目し、宣伝しようとしたのは、国外の演奏者・演奏団体による公演ということであろう。普段であれば、同じ時期、同じシーズンに来仏することが珍しい、国外の演奏者・演奏団体が一つの芸術祭の中に出演するという、貴重な機会を宣伝するのは当然のことであろう。さらに、大芸術祭の聴衆はパリ市民やフランス国民が多かったであろう。そのため、さまざまな国外の公演の方をパリ市民に向けて宣伝するほうが、大芸術祭自体にも注目してもらえたであろう。

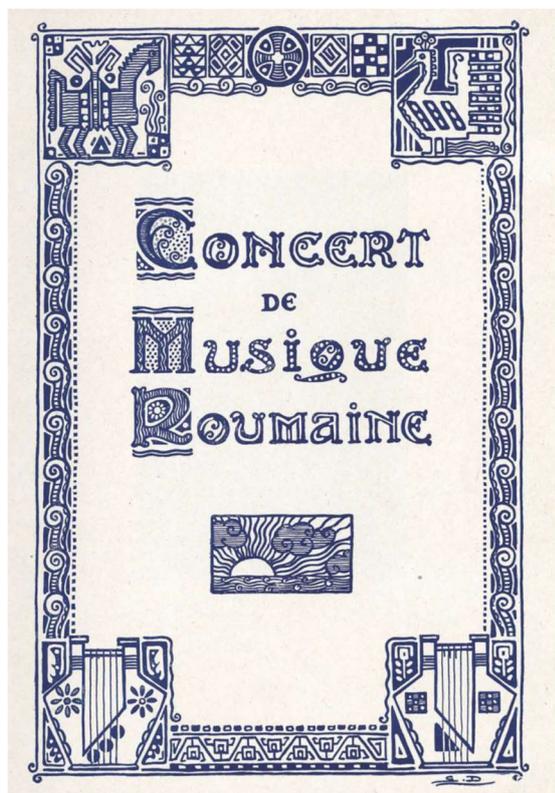
3-4 自国の音楽を取り上げた演奏会

ルーマニア音楽ガラコンサートとチェコスロバキア音楽祭は、西欧諸国ではあまり演奏されない両国の作品を発信する機会であった。ルーマニア音楽ガラコンサートは、ルーマニア国王・王妃の参列のもと、コロヌ管弦楽団の演奏、ジョルジュ・エネスコ Georges Enesco (1881-1955) 指揮で行われた。エネスコの《ルーマニア狂詩曲》や、ノンナ・オテスコ Nonna Otesco (1888-1940) の《アルミードの魅力》とミシェル・ジョラ Michael Jora (1891-1971) の《モルドバの風景》の新作の管弦楽曲などが演奏された。

チェコスロバキア音楽祭は、ラムルー管弦楽団とプラハ合唱団の演奏によって3回にわたり行われた。作品はスメタナの《売られた花嫁》序曲、ドヴォルジャークの《謝肉祭》序曲、パヴェル・クシーシュコフスキー Pavel Křizkovský (1820-1885)、ヨセフ・スク Josef Suk (1874-1935) などの器楽曲、合唱曲が取り上げられた。

どちらの国の公演に共通していることは、公式プログラムに自国の音楽について、そして作曲家と作品について詳しく解説文が掲載されていることである。聴衆は演奏を聴くだけでなく、知識として両国の音楽文化を理解する機会となったであろう。

以下の図は、両演奏会の公式プログラムの一部である。図7に書かれている字体や模様、動物や楽器のイラストは、ルーマニアの伝統的なものであるかは分からないが、当時のパリの新聞や書籍、絵画で見られるものとはだいぶ趣向が違う。一方、図8にはチェコスロバキアの伝統的な生活の様子が描かれている。



(図7) ルーマニア音楽ガラコンサート



(図8) チェコスロバキア音楽祭

この他にも、自国の音楽を取り上げた演奏会は、ロシアのピアニスト、アレクサンダー・ボロフスキー Alexander Borovsky (1889-1968) のロシア音楽リサイタルがある。この演奏

会では、チャイコフスキーの《ト長調ソナタ》やムソルグスキーの《展覧会の絵》、スクリャービン《焰に向かって》、プロコフィエフ《前奏曲》、ストラヴィンスキー《ペトルーシユカから三楽章》など、19 世紀のロシア音楽だけでなく、当時の最新鋭のロシア作曲家の作品も演奏された。

一方、同じロシア出身で、1924 年にはフランスを拠点に活動していたセルゲイ・プロコフィエフ Sergei Prokofiev (1891-1953) も自作品を発表する演奏会を行っている。《ピアノソナタ作品 38》や《エチュード作品 2-3》に加えて、女声歌手ゼナイード・ユーリフスカ Zénaïde Yourievskaya (n.d.-n.d.) と共に、いくつかの歌曲も、プロコフィエフは演奏している。

このように、大芸術祭は、フランスにとっただけでなく、さまざまな国の音楽家にとって、自国の音楽や最新作、つまり自国の今の音楽文化の状況を世界に発信することができた場であったことが分かる。

3-5 その他の公演

これまで、さまざまな国の演奏家・演奏団体による公演について記述してきたが、その他にも特色ある公演が行われた。公式プログラムには詳しく記述がないが、イギリスからはリード合唱団が出演した。ポーランドのピアニスト、イグナツィ・パデレフスキ Ignacy Paderewski (1860-1941) は、ショパンやリスト、ベートーヴェンなどをリサイタルで演奏した。アメリカを活動拠点にするピアニスト、ヨゼフ・ホフマン Josef Hofmann (1876-1957) はシューマン、ショパン、ドビュッシーなどを、スタンウェイのピアノによって、リサイタルで演奏した。

フランス国外から出演したのは音楽家だけではなく、ダンサーも多くいた。クロチルド・サハロフ Clotilde Sakharoff (1892-1974)、アレキサンドル・サハロフ Alexander Sakharoff (1886-1963) は、バロックから現代曲まで、さまざまな音楽で踊るダンスのガラコンサートを行った。音楽の公演だけでなく、ダンスのみの公演もあるのもオリンピックつまりスポーツとの関連もあるかもしれないが、ダンスやバレエが当時の人々にとって人気の高いジャンルであったとも考えられるであろう。

4 まとめ

これまで、フランス国内と国外の演奏者・演奏団体に分けて、公演内容を見てきたが、それらを振り返り、フランスにとって大芸術祭というのは何であったか、大芸術祭を通して、フランスは世界に何を発信しようとしていたのかを考察する。

まず、演奏された曲目から考えられることについてである。フランスの演奏者・演奏団体、特に、管弦楽団によって演奏された作品は、存命中か没後間もないフランス人作曲家の作品が多く、ロマン派つまり前の時代の作品がなかった。また、フランス国外の作曲家の作品を演奏する場合も、フランスのそれまでの時代にパリの人々が熱狂していた、イタリアオペラやワーグナー作品も演奏されていない。くわえて、当時のドイツの作品、前衛的な新ウィーン楽派の作品もない。これは、ドイツ、イタリアが第 1 次世界大戦の敵国であったが理由であると考えられる。このパリ・オリンピック大会にドイツは出場しておらず、また、イタリアはオリンピック自体に参加しているが、大芸術祭には参加していない。

これらをまとめると、フランスにとって大芸術祭というのはロマン派以降のフランスの今の音楽を発信する場であったことがわかる。前時代の作曲家や、19 世紀にパリで流行したイタリアオペラやワーグナー作品など、他の国の音楽への依存から脱却し、フランス人によって自国の音楽を発展させていこうとする意志や姿勢を、この大芸術祭からはみだせるが、この姿勢というものは、1871 年に設立された国民音楽協会、あるいは、1909 年に設立された独立音楽協会の理念と一致するものがある。フランス音楽の創造を目指すこれらの協会の理念は、次の時代にも引き継がれていることは、大芸術祭のフランスの管弦楽団によって演奏された作品の多様さに表れているだろう。また、このように観点からみると、フォーレの《プロメテウス》とオネゲルの《ダビデ王》が取り上げられた演奏会というのは、ロマン派以降のフランスの音楽の歩みを象徴するかのような演奏会として捉えることもできるであろう。

次に演奏団体の国の数を見ると、全公演の 2/3 以上が、国外の演奏者・演奏団体の単独公演あるいはフランス国内の演奏者・団体との共同公演に行われていた。また、国外の演奏者・団体は国内の数の 2 倍以上であった。また、新聞記事や広告で宣伝するのは、国外の演奏者・演奏団体ばかりであった。また、公式プログラムにおいて、国外の演奏者・演奏団体について詳しく紹介、解説していた。これらのことから、国外の様々な国の公演を一度に行うことができるフランス・パリという都市は、国際的な音楽家を呼べる十分なコネクション力や経済力あることがわかる。また、そういった多様な公演をパリの人々は求めている、すなわち、パリの人々の音楽文化への関心の高さも見ることもできるであろう。つまり、大芸術祭を通して、フランスは、パリは世界の音楽文化の中心都市であるという自負やその立場を維持し続ける姿勢を発信していると言えるであろう。

最後になるが、芸術競技の音楽部門と大芸術祭の関わりをみってみる。実は、大芸術祭のために来仏した作曲家や指揮者が、芸術競技の審査員も行ってた。審査員はメンゲルベルクやエネスコなどにくわえ、フランス国内のフォーレ、オネゲル、ラヴェルなども合わせると計 43 名⁷という豪華すぎるほどの審査員によって構成されていた。一方、音楽部門の出展作品は 7 作品で、受賞作品もなく、芸術競技に対する期待値は高いものの、その実際は期待外れなものになってしまっている。オリンピックの歴史をみると、この芸術競技は第 5 回ストックホルム大会 (1912) から第 14 回ロンドン大会 (1944) までにしか、オリンピック憲章によって開催の規定がされておらず、後に芸術展示、文化プログラムと形を変える。1924 年のパリ大会では、明らかに芸術競技よりも大芸術祭の方が盛り上がり、人々の興味関心も高かった。計 7 回だけでおわってしまう芸術競技の行く末は、このパリ大会の時点でもう見えていたのかもしれない。

近年、オリンピックはスポーツの祭典だけでなく文化の祭典でもあるとよく言われているが、文化プログラムが制定されるよりもはるか前にも、1924 年パリ・オリンピックではフランス音楽の今、そして世界の文化都市パリの在り方が、大芸術祭を通して世界に発信されていたのである。

(博士課程 2 年 クラリネット)

⁷ 審査員は、シャルル・ヴィドールを審査員長として、先述の音楽家の他に、ベラ・バルトーク、ナディア・ブーランジェ、ギュスターヴ・シャルパンティエ、ジャン・シャンタンヴォワヌ、ジャック・ダルクローズ、マニュエル・ド・ファリャ、アルテュール・オネゲル、ヴァンサン・ダンディ、シャルル・ケ克蘭、アンリ・ラボー、フローラン・シュミット、イゴール・ストラヴィンスキーなどがいた。

参考文献

Comité International Olympique (国際オリンピック委員会)

1924 *Charte olympique - Statuts du comité international olympique, règlements et protocole*

Comité Olympique Français (フランス・オリンピック委員会)

1924 *Les jeux de la VIII^e olympiade : Paris 1924 : Rapport officiel*

1924 *Programme de la grande saison d'art*

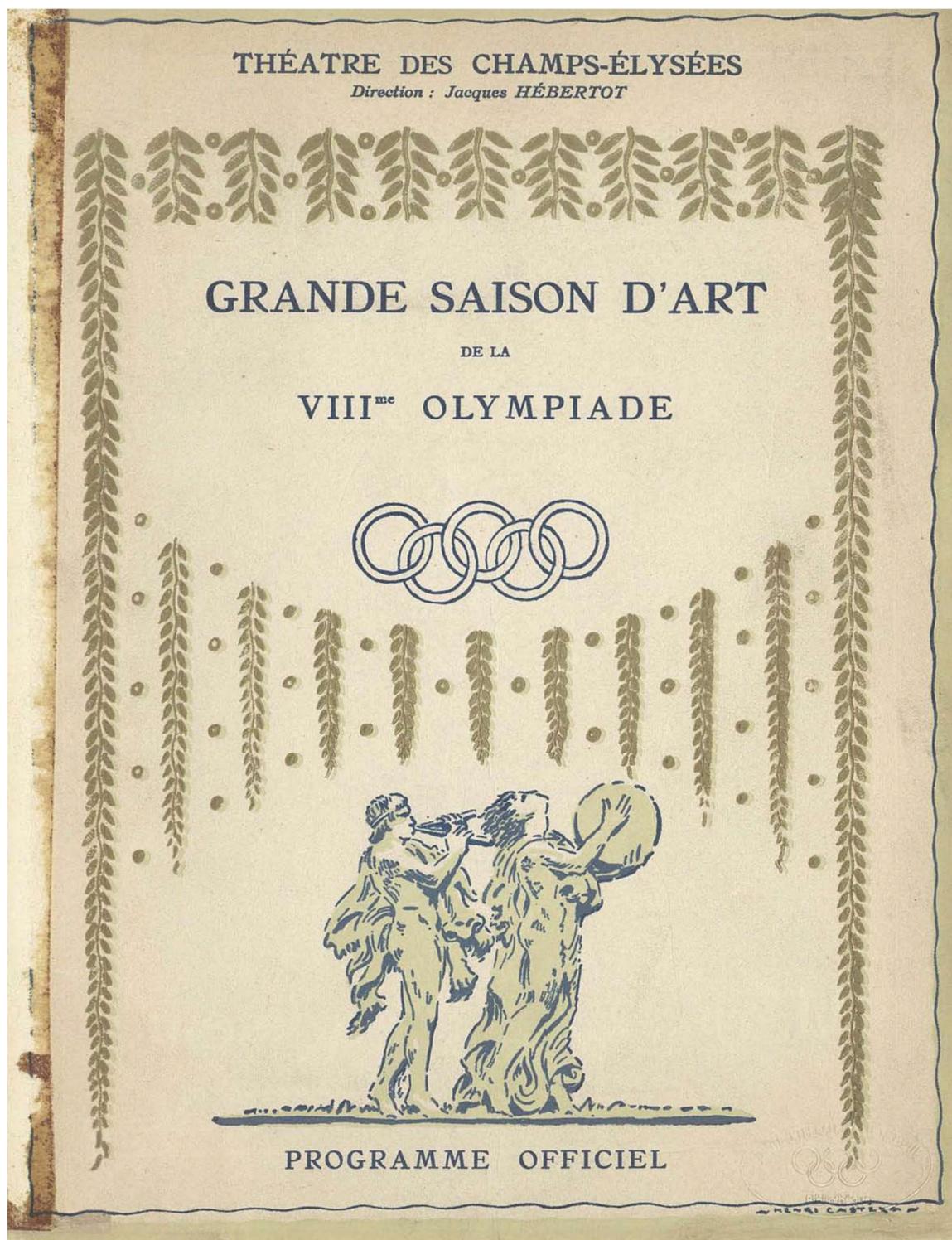
Henig, Stanley (ヘニッグ, スタンリー)

2012 Music for the Cultural Olympiad - Paris 1924, *Musical Opinion*, 135/1487, 16-18

尾崎 正峰

2018 「オリンピック、芸術競技、音楽」, 『一橋大学スポーツ科学研究室』37, 3-20

巻末資料



大芸術祭の公式プログラム表紙

大芸術祭の公演一覧

月	日	公演内容
5	2	公式開会式
	2	クロチルド・サハロフとアレキサンドル・サハロフによるガラコンサート
	3	フォーレの《プロメテウス》、オネゲルの《ダヴィデ王》
	4	パリ音楽院演奏会協会の演奏会
	5	マリア・バリエントスとワンダ・ランドフスカの古楽演奏会
	7	エドゥアール・リスラーのピアノリサイタル
	8	マリウス＝フランソワ・ガイヤールのピアノリサイタル
	9	コロヌ管弦楽団の演奏会
	10	マリア・バリエントスとワンダ・ランドフスカの古楽演奏会
	11	アレクサンダー・ポロフスキーのロシア音楽ピアノリサイタル
	12	プロコフィエフの自作品の演奏会
	14	ラムルー管弦楽団の演奏会
	15	ナント・スコラカントルム合唱団の演奏会
	16	ルーマニア音楽ガラコンサート
	17	アンナ・パヴロワのガラコンサート
	18	コンサートヘボウ管弦楽団の演奏会
	18	アンナ・パヴロワとニノン・ヴァランのガラコンサート
	19	コンサートヘボウ管弦楽団の演奏会
	20	ダムロッシュによるベートーヴェンシリーズ
	21	コンサートヘボウ管弦楽団の演奏会
	22	コンサートヘボウ管弦楽団の演奏会
	24	コンサートヘボウ管弦楽団の演奏会
	24	カザルス管弦楽団の演奏会
	25	カザルス管弦楽団の演奏会
	26	バレエ・リュス：《女羊飼いの誘惑》、《牡鹿》、《結婚》
	28	ウィーン国立歌劇場、《ドン・ジョバンニ》
	29	ウィーン国立歌劇場、《後宮からの誘拐》
	30	ウィーン国立歌劇場、《フィガロの結婚》
	31	ジョセフ・ホフマンのピアノリサイタル
	31	ウィーン国立歌劇場、《後宮からの誘拐》
6	1	ウィーン国立歌劇場、演奏会
	1	ウィーン国立歌劇場、《フィガロの結婚》
	2	ウィーン国立歌劇場、《ドン・ジョバンニ》
	3	ダムロッシュによるベートーヴェンシリーズ
	4	バレエ・リュス：《プルチネッラ》、《うるさがた》、《結婚》
	6	バレエ・リュス：《女羊飼いの誘惑》、《牡鹿》、《ペトルーシュカ》
	11	バレエ・リュス：《結婚》、《牡鹿》、《イーゴリ公の踊り》
	13	バレエ・リュス：《教育不足》、《ブルートレイン》、《ペトルーシュカ》
	14	リード合唱団
	15	リード合唱団
	18	イグナツィ・パデレフスキのピアノリサイタル
	18	レオン・ザックスの《城主たち》
	20	バレエ・リュス：《パレード》、《うるさがた》、《牡鹿》、《ブルートレイン》
	22	バレエ・リュス：《プルチネッラ》、《牡鹿》、《結婚》
	22	レオン・ザックスの《城主たち》
	25	バレエ・リュス：《教育不足》、《うるさがた》、《春の祭典》
	26	レオン・ザックスの《城主たち》
	27	バレエ・リュス：《パレード》、《ブルートレイン》、《女羊飼いの誘惑》
	28	バレエ・リュス：《春の祭典》、《プルチネッラ》、《結婚》
	29	バレエ・リュス：《教育不足》、《うるさがた》、《チマロジアーナ》、《ペトルーシュカ》
	30	バレエ・リュス：《女羊飼いの誘惑》、《ブルートレイン》、《結婚》
7	2	チェコスロバキア音楽祭
	3	チェコスロバキア音楽祭
	5	チェコスロバキア音楽祭
	?	ダムロッシュによるベートーヴェンシリーズ